

働く意欲や能力を持つ人と社会をつなぐ

フェアトレード

伝統技術の継承

障がい者支援

NPO法人フェア・プラス

代表者：理事長 新開 純也
所在地：京都市東山区三条通大橋東入2丁目下
る巽町442-9 東山いきいき市民活動セ
ンター内
設立：平成24年6月5日
職員：3名
事業内容：途上国の物作り支援、障がい者の物作り
支援、市民の理解促進とネットワーク作り

○事業・活動の概要

NPO法人フェア・プラスは、働く意欲や能力を持つ途上国の方たちや障がい者の方たちに、働きがいのある仕事を作り出し、そうした方たちと社会との懸け橋になりたいという思いの下、設立された。

外部の様々な団体と連携・協力しながら、市場で通用する商品の開発や、その生産体制を強化するための支援、生産者が抱える課題に関心を向けてもらうための活動などを行っている。

○魅力的な商品の開発

途上国の人たちに、日本の市場で評価される商品を作って仕事を持ってもらおうと、京都市の着物会社と共同で、帯や巾着等の商品を開発した。

帯などの商品は、フィリピンのマリナオ村という山村で、「アバカ」という植物の繊維を使い、村人の手によって作られている。商品開発に当たっては、「マクラメ編み」というマリナオ村の伝統技術をいかすこととし、着物会社やプロのデザイナーの協力を得ながら、品質の高さにこだわった。

平成30年7月時点で、同法人の拠点である京都府以外に、東京都東銀座でも販売しており、平成30年に入ってから5誌のファッション雑誌等で取り上げられるなど、評判は上々である。

○発想を転換した働き掛け

フェアトレード商品の販売や普及・啓発においては、まずフェアトレードの意義を説明し、理解を得た上で買ってもらうという例が多い。しかし、そもそもフェアトレードに興味や関心が無い人は、そうした販売会などに進んで足を運ぶことがないため、同法人では関心の薄い層へどのようにして働き掛けるかが課題であると捉えていた。

そこで、フェアトレードへの関心の有無にかかわらず、多くの人が訪れる百貨店や専門店に商品を置いてもらうこと

とした。商品自体の魅力で買ってもらった後に、付属のリーフレットやタグを見て、初めて、どのような素材を使い、誰の手で、どのように作られた物なのか、そしてその商品を買うことで生産者の生活を豊かにできることを知ってもらえるようにした。商品自体の魅力に加えて、商品が持つ背景に共感してもらうことができれば、それを理由とした新たな購買行動が期待できる。

また、着物のファッションショーで帯などの商品を使ってもらったり、プロの写真家の協力を得て商品の写真を撮り、PR用のポストカードを制作したりしている。こうした取組には、着物好きな人や協力してもらった写真家のファンに、それぞれが「好きなもの」をきっかけにして、フェアトレード商品の存在を知ってもらおうという意図がある。

○生産体制の確立

マリナオ村の人たちは、元来、「アバカ」でサンダルなどを作っていたが、その収入は生活費のごく一部で、主には畑作をして生計を立てていた。だが、現在は、「アバカ」から作った商品のみで4~5人の家族を養えるほどの収入が得られる人も出てきた。

マリナオ村では、これまで各個人宅で商品を作っていたが、現在は、平成29年に村に建てられた共同作業場に集まって作業をしている。同法人は、生産に必要な道具や練習用の素材を作業場に提供し、さらに、ベテランの職人に講師料を払い、ベテランから若い職人へ、技術の継承がされるような仕組みを作るなど、職人の技術を向上させるための支援を行っている。

また、個人ではなく生産組合から商品を買ひ、生産組合に代金を支払うシステムにしている。組合が作られる以前は、村の職人には取引における交渉力など全く無い状態だったが、組合を組織することで交渉力が改善されてきている。



○協働によって事業の可能性を広げる

同法人では、外部の様々な団体と協働することを大切にしており、それぞれの力を発揮し合うことで実現した事業が多くある。

例えば、「アバカ」を用いて考案した最初の商品はクラッチバッグであったが、海外で活躍するジュエリーデザイナーと知り合ったことをきっかけに、「マクラメ編み」の繊細さが着物によく合うのではとの気付きがあり、そのデザイナーからデザインの協力を得て、「JIU」というブランドの新たな商品が生まれた。

また、関西地方でフェアトレード商品を取り扱う店舗をまとめたマップを作成した際には、フェアトレードに関心を持つ大学生に、店舗へ足を運んで調査をしてもらった。

そのほか、西陣織などの伝統技術を継承しながら手工芸品を製作している障がい者の就労支援事業所と連携し、京組紐のプレスレットや西陣織の小物入れといった商品を「AKE」というブランド名で手掛けている。

○今後の活動

「JIU」や「AKE」が立ち上がり、途上国の人たちの暮らしを豊かにするための、あるいは障がいのある人たちと社会をつないで自立を促進するための一つの道筋ができた。

しかし、発展途上の地域のうち、マリナオ村だけが豊かになればよいというわけではなく、フィリピンの中でもマリナオ村以外にも暮らしの向上が望まれる地域はある。また、国内においても、働く意欲や能力がありながら力を十分に発揮できずにいる人や、素晴らしい伝統技術がありながら現代のニーズに合った商品の提案に苦慮し、勢いを失いつつある産業もある。

今後は、これまでとは別の地域にも目を向け、より魅力的な物作りなどを通して、それぞれの人が持つ強みをいかしながら社会と関わっていける事業を行いたいと考えている。

公表日：平成30年10月22日 取材：平成30年7月「エンカル消費自治体サミット(徳島県主催)」にて
外部リンク：<http://www.fairplus.org/>